

初年次教育と学士力

— 多様な入学生に教育の質をどう保証するか —

【企画者】川野辺裕幸（東海大学・教育支援センター所長・政治経済学部教授）

【司会者】川野辺裕幸（同上）

【報告者】川野辺裕幸（同上）

押野谷康雄（東海大学・教育開発室長・工学部教授）

山本 義郎（東海大学・学習支援室長・理学部准教授）

園田由紀子（東海大学・チャレンジセンター・専任講師）

尾崎 由佳（東海大学・チャレンジセンター・特任講師）

1. はじめに

大学全入時代を迎え、広範な入試種別を用意して入学者を確保することが、どの大学でも当面の入試戦略となり、学生間の学力格差の拡大は深刻である。入学者間の基礎学力の差に拡大傾向が見られるばかりでなく、大学進学意欲、学習スキル、社会的スキルに欠ける新入生が増加し、既存の教育体制に則った教育が困難な学生が生じてきており、これらが長期在籍、中途退学の主要な原因となっている。一方で、社会からは、高い質を身につけた卒業生を送り出すことが大学教育に求められている。その一つの表れが、中央教育審議会の学士課程教育に求められる学士力である。このラウンドテーブルは初年次教育が果たすことのできる役割を多方面から議論した。

2. 入学前教育を初年次教育にどう連結するか：入学前 e-Learning を起点として

（発表者：川野辺裕幸）

推薦系入試による入学者の増加は学習履歴の多様化に拍車をかけている。他方で入学決定から授業開始までに比較的期間があるために、基礎学力の確保を中心とした入学前教育が盛んに行われている。学士力の獲得につながる初年次教育として、東海大学で行われている入学前教育の中で、付属高校からの進学者を対象とした e-Learning による入学前教育

を例にとって考えることとした。論点は、基礎学力を確保する上での入学前 e-Learning の有効性、自学自習のシステムである e-Learning で、学習者のモチベーションを上げるために、高校、大学の教員ができることは何か、基礎学力の涵養と進学先の学部学科へのアイデンティティの確保をつなげるための教材はどのように開発したらいいのかなどである。

3. 個別指導室を活用した理工系基礎教育科目の FD 活動

（発表者：山本義郎）

多様な入試選抜方法により、入学者の学力には明確な差が認められるようになっているが、特に理工系の基礎科目（数学、物理など）についてはその差が大学における基礎教育科目の理解度に大きな影響を与える。リメディアル科目の設置により対応する場合にも、学生の真の理解のためには、個別相談が重要な役割を果たす。

東海大学の湘南校舎に、2008年4月より開設された学習支援室「Sナビ」では、単に学生の駆け込み寺としての相談場所となることにとどまらず、Sナビを通じて理工系基礎教育科目の改善を行うことを目的としている。具体的には、学生の相談内容の概要を授業担当者および指導担当教員に連絡することで、授業においてわかりにくかった点を授業担当

者に連絡するだけでなく、学科の指導教員も学生が何につまずいているかを認識する一助としている。訪問記録から、科目の指導方法の問題点などを拾い上げ、フィードバックすることでFD活動の一端を担う位置づけととらえ、運用している。

4. 指導教員とのかかわりの中で

(発表者：押野谷康雄)

日本の多くの中学校、高校ではホームルームが毎朝・夕に実施され、担任が生徒の様子をその目で毎日確認している。多様化した学生が入学している現在の大学において、このような指導体制が無くなることは「相談相手がいない」「居場所がない」などの問題を引き起こすことにつながる。これを予防するために新入生研修会や個別履修相談など様々な取り組みがなされているが、入学当初だけではその効果は長続きせず、その結果半年以内につまずく学生も少なくない。したがって継続的な個別指導が不可欠であるが、時間を十分に取って教員が学生個人と向きあうことは容易ではない。

そこで、このような問題を解決するために、初年次のゼミ形式の授業において指導教員がほぼ毎週会う授業を運営し、いくつかの工夫によって個別面談に近い効果を出すことができた事例を報告した。GPAや出席率など具体的な指標によって本取り組みを評価した結果を紹介しながら「指導教員とのかかわり」といった視点から、多様な入学生に対する教育の質の保証を議論した。

5. 体験型学習：「集い力」におけるアサーションの学び

(発表者：尾崎由佳)

東海大学は「集い力」という科目を開講し、社会的スキルの向上を目標とした体験型授業を展開している。本発表では、初年次教育としてこのような体験型授業が果たす役割と今後の可能性について議論した。特に、この授業の一環としてアサーション(適切な自己主張)を学ぶ機会を設けた事例について考察す

る。アサーションは、大学生活において新たな人間関係を築き、教員や他学生と積極的に関わりあいながら学習を進めていくために重要な役割を果たす。このアサーションを学ぶために、受講生は“複数の視点から自分の自己主張のスタイルを認識する”というワークを体験した。複数の視点とは、①自己評定(様々な日常場面における自己主張のスタイルについて自己評定する)、②自己観察(ロールプレイとして様々な日常場面を想定して自分がどのように自己主張するかを演技し、その様子を省察する)、③他者評定(自分の自己主張スタイルを親しい他者によって評定してもらう)の3つである。このワークによってもたらされた学習効果について、学生のレポート内容をもとに分析することを試みた。

6. 「集い力」におけるチームワークの学び

(発表者：園田由紀子)

多くの大学では、教育の質の向上を目的とした体験型授業、プロジェクト型授業が多く行われるようになってきている。初年次教育においても、基礎、入門ゼミナールなど学生間、または教員との対話を重視した授業が多く行われ、少人数教育によるきめ細やかな指導により、大学への適応、ゼミナールを通じた友達作りなどの成果をあげている。しかし、学習意欲の低い学生やコミュニケーションスキルに欠ける学生の中には、少人数による作業の中で、他者と協働する力やその楽しさを理解できない学生もいる。また、近年、クラブ、サークルなどの課外活動に参加する学生も減少し、多様な学生同士が協力して何かに取り組む機会が減少している。このことから、授業内で、友人以外の人と、目標を共有し、協力するために必要な力を学ぶ必要性が強まっている。今回は、「集い力」という授業において行った「ペーパータワー(紙で作った塔)」を作る演習を通して、「チームワーク」構築を体験的に学習する試みの成果と課題を報告した。